俳諧京都歳業

へ 5
6500

へ5
6500

陽明文庫

陽明文庫

祖翁の風徳よりおのづから出来る拙
むかし陸奥国に能の職業の源まて
口表まあるとなくゆきかの為
大師代よりまれにあぬる為ひとりの人のゆゑい
きへ法名はいかにかの情を
のこしのひめ遺愛の地ハ此ふちをあらわ
信授菩提寺源高ひとふを建新堂

遠くまで出風をまとうて生涯我が身を事に
もつ時分降るほつ降ればおのづから
追薦の会式執行ひ向後毎年
集会をこの所の冊子拵へ渡りて行く
ちくとうて文車みこしあまり幡をこしらへ
生人命ある地の形分も知れまゐ知れば
まことに恭拵文百五十余通とうまつり
むかし

乃ち十人ばかりの志願者を撰び出だしたる
中に花さも花利遠とも申分の人
多能拵しも有れども当寺を祖師を信
よ仰られし御姿ゆうのいやつを拵へ
主分の為寺沖老人数八角よ遠法を出
遠忌よ値ふ事数い出乃ふ当ひありとて
こひの為ひ秋のまふうをみ思ひ出て栗津の

祖堂より請て伊賀北長田を中ひとへて
板倉のちかくに竹間堂をたつ手負ものを
ふらつかあるを助すの報恩も地蔵菩薩の
御堂まをせしに藤の つの枝いまこの間
出一引き塔間能力遠ましけ 塚東形間
寄稿を法華を設け 四方の大石を陸
こしをもを集へ 知れ計なるも遺骨を拾て

御堂より宝物とし寺間古い生砂のつを拾ち
かうらかるる 珠玉より服法ひとしきを
あれといまるかりしとを値を表宝
直指北寺を蔵間 却もひを長を各地を
四神まひ一て法間ものを意義乃へを合い流を
をを原能みのをを日夫能す道より
人をの一まを能北を戒義をを

皆是吾師乃厥恩報徳乃志にて
深かるまゝの程を慮る事不楽括て しるす人

天保十四卯年冬十月十日

秋沸る精も小籠地にほとゝきす

境も土手も無し槙の冬枯　卓池

支梁亭

口切に境も庭もなつかしき

廿
蕗の根葉をくつす水音　規外

旅人も古国の駄に申けり

こともなく拂ふ二人稀麻に米のもしき

蛙の納豆起ふ出しけり　蓬宇

清庵講酒の中の杯酒井

に鍾しへ杯楚席　惟一

葛の葉返りて見せなりし秋の霜

翁のみけり原る根奥门　碧山

三物新撰蒼浪權右衛完

京にあきるゝ嵯峨の初しや冬住居

火うつりもやき竈出しの炭

完

伍

雑喜谷小坂を新宮や大根引

姫こそ神の恵十月の空　宜彦

いさ庭は雪見ぬ蕗ふきまて

炉の炭梯へ手引き埋火　朱芳

前栽や掃ふ紙屋雪の昼

枝垂の残る雪ふつゝきき　清皐

旅宿

志賀寺て手枕かりる寒さかな

春よりつゝふ鶯の志賀寺　石采

夫溝部きふ袴を着り

凍れみちとのそく新年　東平

篁主の眉ふなるる神の高華

そや眼のきこの恵水のそくつき　携丘

如蓑の旅鈴被て

埋火や望ふハ君の新法師

小春なる窓れ抜け美　猪水

冬籠又ようりん世はら

昏れ敷のめつ高ろ　青可

三河国鳳来寺に詣ける時
ほとより例の病おこりて麓なる
宿に一夜をあかしける

杖苑ひへいの宿もして旅寝哉　芭蕉

小枝れにたまるハと溜る海　塞馬

住つゝも旅の心や置巨燵

旅ふきぬけしつる木枯　洗竹

自画自讃

いかめしき音や霰の檜笠

旅を忘れて手折る山菜　東石

淡にまこと見せたり法衣越

檜のすゝきをのえん縁　五琴

面白しと雪の花をたづねん

梅の香を白かと見の原　圭布

毛衣ふつつとぬぎ鴨の足

きらきらしくも見えぬ大哉　三岳

三物保美とつかまつる

梅樹さや咲かめん保美の里

日数延うる秋の哀か　朔古

杜國ゥ墓をたづ

麦生てすきこのうれや富士

布子哀哉一府のつろき　筌露

伊良古崎ハ唐湾の果ニ
唐の方ヘ向て渡る海と云て
いと唐なる方もよあると
思ハれあまれ彩る所かな

唐津川見ニ焼しいろ浦
砂の色ニ成かゝる　雑炊　波文

意ひ合ひ洗ひ上るさゝ茶
宵戸ハ明るの明るゝの日　貞山

天津縄手

赤く染て高上ゆる新造師
浪ハあるる者のこの見ゝ　茶園

老嘯の蔓もめうとの鶴さまき

よもすがらてもの思ひの思ひ　梧容

古き世を忘れのけ

裏の浮なてしこ咲る空捕ふ

きりぎりす俳句見せる蓼食虫　水竹

野つこの枯手高きるきりぎりす

かしけて色のあき猫柳　嵐牛

旅人を見送る

てるぬさく深る空のあさの郡

秋年色のつきし山陰　蘭所

隱さうぢの法さの淋しい形や

月の細り手水鉢うけ　六蟬

さく菓や粉糖のうす紙白粉

雪ふるさとの鳴　杜水

雪の松や菓ぶまとはしの明手屋

形ばかりの歌屋もあり笠　為中

之燈を翠ばかり家菓ふ場忠

高友門人ロ〜きさうす

いうめと笠いい意仕

さまざまの形ばかりや雪の枯屋敷

旅ふ屋ロもさ寒ばかり　呉雪

節季候すゝめの宿に出立哉

浮世ハ蒼々市の獨海　蘇雲

ましほしく見しや浮世の煤掃

重ね出日ハ笠の膝しき　一應

あら何ともな昨日ハ過て鰒と汁

霙ふけこのゆきゝ絶ぬの月　青坡

樵藤形の手の寒さ経ハ

手まゝ遊笠きて宇雛もきさなかめ

枕て縁つく君のぬくもり　稲居

振舞

まひしさはら雪
とりきや冬至居芸 卓池

さゝ月や川まで下る戸の流れより 碧山

流れる蕉葉は地を經し色て凍し 南輝

冬かれに雪りも知ぬ枇杷の花 仙壺

霜月日和静き寺して枯尾花 髙峯

休て居帰や東山のもみぢ迄 青雀

呵ら殺まて積つもや霰か紅葉 伯耳

霰ふりかゝる眺の淋しく木の葉 抱布

寄合の座りまてなり納豆汁 鶯暁

蕙蘭(けんらん)と麥や新子唐　守唐

庭掃まてゝ柱釣りそめ昆の家　子恰

十日や砂岩ゝ岩の穴　幸彦

見さかりて越つる時や雪しまき　尚古

水きしたゝきて海原や新仏　其篤

こそ出や門ふ高まて洗ひ秋　一晁

蜻の巣乃孤てなるや冬木立　朴山

新藻や焼うけてちる紅葉　麗々

本うゝや満汐まる西ひうり　竹友

新藻ゝ乱まる紅葉　其笠

牛ずけこそ捕ふ彩雪菜　摂舟

魚出けゝ時ゝ見の二尺縄手ゝ　里桂

藪主ゝ咲ゝ知る人ゝ桂　芳山

鍋て時ゝてるや まこひうり　嵐牛

寒てうゝも志ゝ燃る撈ゝ　清皐

池ゝ見ゝ見ゝ乃ゝ枯尾ゝ　栗谷

横ふ猛き物ども多く其嵐
戸にまて来る也小春の風の竹里
白雲へ落る日の影小さく秀波
打ふる木も持つ葉あり重菴杜水
苦紫草小鳥の巣ぬ砂り梧容
この夏枝を拾ひ人なし神の留主自蓮
去つとも掃き雲の森この郭夷白
涼先ふなるたのいきつも抱きうし知来

雲こつ八峰つ無き雲も玉霧五水
枯く粧新の庵しき屋雲苔五岳
分つ事く大手の雲や雲の月貞山
日の入て春の明りや この夏屋花為中
雲空も渡るして雲日仕立ち猪水
雲鶏鳴るこの秋たしや きしい水畔舎
なるおとの多ふ雪積 笠家ふ東平
かすふ源新水や石蔵の雲釜露

汲来る無水気の屋うゑ　蟬禾
世比の色水を洗ふ朝　青芙
掘りうけて富先ゑも雪の原　氷清
ゑて出や能きつまるかな　桶　西八
この世一話簑ふ夢帰る　圭布（シナ）
野宮へ移る雪や子燈ん　武栗
ゑきまりや立形を高きる紅　撈平
産摩の実えてをゑ屋茂所　ゑ新女

日の新の初際つ新の雲　魁甫
人並千さるるる手の蓑　几亭
新蓑のてゑる新師走ゑ　亜梅
手ゑかしく掛てハ以炭生　青坡
山以とあ千枯ゑ瀧の水　布青
湖ふ舟ゑつなし多新月　鳴露
蓑のむゑゑ生鯉外　雨篁（ヨハリ）
外入る茶ふ木の葉の音　楚江

山風を笑ふごとくやちまた炭　巴南
志ぐれや寛ぐ紙屋の夢　文来
しらぎくや秋ふかきもの藪樗　青白
夏屋ふきて黄ひし柿の紅　其青
しらぎくや海の夕なるかりがね　宜彦
蓼ちるや中ゝ漂ひる小鴨の毛　文之
石咲の桔梗合ひし小百姓　一武
紅の対をなすふ猪熊十枚分　流芳（イセ）

雪霽れ笠ゝ法ゝ堂の香　霞汀
ゆきちらしの涼ゝ夕しれ　探齋
ちのりもむふ桔屋形　昌風
山茶花や男一人ひとり　崔渚
代のゝ山ゝ寒ひ水　是誠
物干ゝ夜ゝ月やさ枝さしわ　岐蝶
孫先ゝ続ゝ屋敷ゝ紅仏　都岐雄
山道の行ゝ人ゝ立　笑ゝ

冬葉の一人寝る白ひの秋　奥州　一止

志ぐれや牛島の鶴の角　イヨ　鳥岬

枯薄のつくづくの原や秋博士　京　松臓

こまぬきの門や冬の月　竹仲　呉雪

鶉笠てうらを祝ふ年の暮　江戸　流芝

寒の火に照る名残秋の　雪巣

枯枝のうしやうこみの冬籠　塞馬

仲秋の月つくしき月新　壺仙

山のふ月いのうまてもつまて　洗竹

蜆貝のうりはうしつまこう郎　可月

岌りの巻の巻新の博士う秋　溪水

火ばちのさんしの竈や冬の蠅　薫助

安はうしつまこう郎　一葉

新うり秋里東家中や冬博士　辺麦

桂こき信濃路をたちまちふきまぜ　宜春
鶴壺千年をふるいをを飲まれぬる　佳暁
四休の蕉くゝ童のつくゝやをの入　霞竹
野ゝ見る山の高きや冬木立　青季
野ゝ出る百姓奥やとの子供　浦笋
夕雲や岸を洗ふ思ひ紅　冬月
なりかゝつの梅見ひきるゝわ鶯　青可
桂宮や筵千かゝ演舞　翠錦

蒼てもるゝ冬の牡丹茶　錦水
雪一枝波壇を撫きる佛弟　里敬
船ゝ新ゝ歌代やとの書　笑價
俗見来のたゝみ高き高業　素中
かし繰て鶴ひすり野の夏　茂翠
人の高くなゝ高りゝ冬の蜀　星水
時笹ゝ傳りゝて法高溝　畝曲
水ゝの水桂茶屋や出ゝか　露麦

新うりて植木見やるかふる家　鷲嶺
あるじてなのまゝ住める家　葵村
まれなる来ふる桂る芝の新　鶴齋
山ちの家し寿持や坊ちに　霞蒿
俳新〳〵寿程子ものきむき菜　狸玉
そこゝゝ鳴いこの見て義の仏　溪橋
西の空明かふゝゝ鐘撞る　俚仙
みる会の蓑ゝらゝや櫂なり　春貫

雪の長引ゝなり俳事　美道
風ゝゝ吹ゝゝ長陽ゝ　鳳岱
日ふゝ秋ゝよゝ住るか　士義
水魯や立ゝも拾ゝ無ゝ　鵞洞
陰ゝけゝゝなる屋住ゝ　禾考
沖時ゝゝ川ゝ拾る芝　風茄
休ゝ不の義ゝ消ゝ拾屋　其英
咲ゝ笑ゝ歩ゝ和ゝ特　杏雨

豆と秋の境也　携丘

なのはなの菜うら枯湯気や水煙　如昇

鉢植のしら菊や井の雲　市井

つまれて穂くきの法す枯屋敷　碓月

晴際の米屋無月松や咲る雪　薄水

聖ゆふもつて二ツ三ツ稲　稲居

風ずれの柏ふるる岩屋敷　守鴎

煤ふりて延る蔦　鶏石

蔦雲

ぬりくれの船のあるやあるの川

庇一ツ寄やれば拾露や夫講　枝墨

ふるさとのすゝやまやふる沖時雨　霞村

山茶花や手ふれ寄る籬の色　杜鵲

ずんりきれ瓶の穴や枯むら　柿巷

枯そゝり屋敷ふるや汐の渋　笳月

ぬり菓子の坊様ふるる時雨　禾月

鶏卵ゝつ壱目ふ白し冬木立　仙巣

細々たるまがいぬきやこしの山　一栖
見うしなはるゝ人のまた枯葉引　机民
ゝ仏ゝ為ゝてゝゝゝやゝゝゝゝ　風樂
秋の月ゝゝゝゝゝ見る子島か　柘二
序押ふゝゝゝゝゝやゝ瀬のゝゝ　陽坡
ゝゝゝゝ枯る屋敷葉　一松
日のなまふゝゝゝゝゝゝゝ　松子
ゝのゝゝふちまゝゝゝゝゝの月　琴松

月の月ゝゝゝゝ見ゝゝ枯屋敷　丈轉
まゝゝゝゝゝの月ゝゝか了咲　左蓼
秋のうちふゝゝゝゝゝゝゝ梅の松　梅史
ゝのゝやゝけゝゝ淋しき屋敷　棟甫
かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ葉　蒼尾
ゝ枯ゝゝゝ始ゝゝゝゝ秋不　涼花
ゝゝゝし枝ゆゝゝゝの雲　可研
沈越千篠月ゝゝゝの月　完伍

白のさして宵ふかき夜寒　蚊文

寒ふかき星出て音もなし　水竹

高殿に入しうたの響　蓬宇

起くふる夏衣なつかしき秋

山風や一枝残る秋の水　玉養

白の川はた年新たにこの夏毛　芳美

毒虫やしうとめきたる紫霄　三岳

毒蟲忘や梅切る枝の蕾　吹角

いつちゆや花くふなる春氷　雀所

意地ゝや博くなる毛如実哉　几藤

切くふ掃寄せくなる春雪　雪斗

風ものく秋八里ふれ博る　規外

青強き意地ものゝ石蕗の花　守山

ものゝふも又しなれ池の堤　可松

霜凍や星物なる寒紅あり　風栗

鶏ゝ薬ふ花ゝ博る　梅府

更る秋や人の斷と朱色の声　朱芳
うかしや苅ぬる嵐袋　嵐袋
ゆき餅を秋の稲妻の空　柿青
鷹さらぬ隠れ所の無仲秋　荷堂
重陽や菊ふかなる秋の路　東石
家ぬ乃竈ぬり直す立秋　秋橘
高雲なる稲ふ見ぬや本歌の歌　五陸
山のうり高雲の下地流るる　六蝉

流雲水の凍る渕先可南　一應
舞ひ下り鮭来の多し重の山　俾車
初雪とゆまてふ降よりう　汝篁
一雪こよ絶てたけ岌仲るの秋　旭甫
横雲や風ふつまりてまく排　潮花
降ちつよこの夕ぬれの玉川時る　波文
風止ぬ小枯弾も果ぬ来ぬり　二青
初石ふ濡ぬ若の秋しうる秋　五蓼

月休は陽立影や枯尾花　相古

行くあなたは行くか茶屋の婆さん　行未

題定の法の無り和やそのあ　柳月

明るき雲の宝りたるの入　一秀

きされや山よかりて一り路　梅二

こ鶴高年兎の巣も虎の穴　石水

はるや鶯もはるを無こりも来　里衡

無ありて天の心るる秋か　兎影

重風やこうるる秋の船　鋏平

深色穂もきふ枯こ芒茶　石采

志つれハ素の陽なり枯尾京　茶岡

鶴を夕雲こ雲のしるを　惟一

明移る星結ぶ雲や時　渊月

雲枯こ茶の枯を雑る茶　卓池

追加

[illegible]　吉田　燃尚

[illegible]　ヨハリ　魯兮

[illegible]　まに　三圭

[illegible]　、[illegible]

[illegible]　、吟風

[illegible]　シナノ　助水

[illegible]　、吾牛

[illegible]　、芳齋

[illegible]　、月哮

[illegible]　、李塘

[illegible]　、墨芳

[illegible]　、李明

[illegible]　、梧芳

[illegible]　、栗人

[illegible]　、雪簑

大楠を又傳この[illegible]、其逸
ふつゝ[illegible]縄の身や縄の重、[illegible]

弘化乙巳秋上梓

富田藏書

三七目
イ